

バードリサーチ 水鳥通信

2014年 8月号



季節前線シギ・チドリ 2014

守屋年史

Photo by 藤井薫

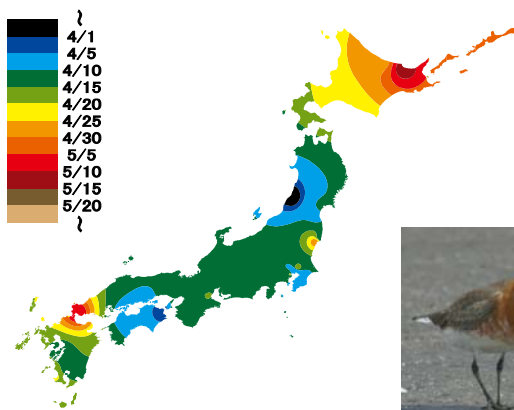
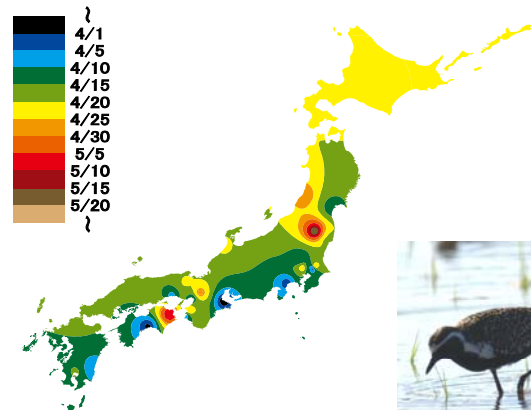
今年も春期に、季節前線シギチドリ調査を行いました。今春は53名の方から、データを寄せて頂きました。ご協力ありがとうございました。対象種の7種について初認情報を分析し、2014年春期の渡来状況が例年に比べてどのような状況であったかを報告します。各図は寒色系が早い時期、暖色系が遅い時期になっています。

ムナグロ

例年、本州で越冬する個体もいますが、4月上旬に初認され、関東以南の太平洋岸で渡来が早い傾向が見られます。今年の春の渡りは、関東、中部、四国の太平洋岸で昨年同様3月末には観察されましたが、北海道南西部では昨年より10日ほど早く到達しました。内陸部ではやや遅れて観察されています。

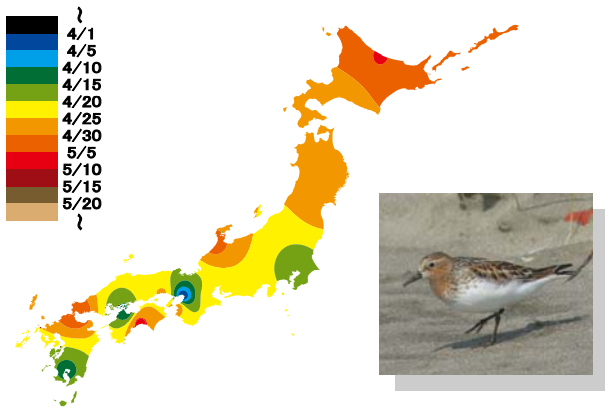
メダイチドリ

例年、本州では4月上旬には観察され始めます。また関東沿岸で、西の地域よりも早めに確認される傾向があります。今年の春の渡りは、昨年と同様に3月下旬には、東北日本海側、関東、四国で確認され、北海道南西部には、昨年よりも10日ほど早く到達していました。



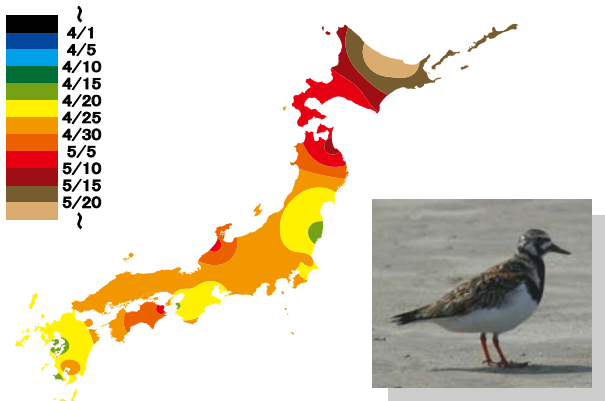
トウネン

例年、本州では4月中旬から観察され始め、北海道北東部には5月上旬に到着します。九州南部、関西での初認は周辺地域よりやや早い傾向があります。今年の春の渡りは、関東までは昨年より8日遅く、北海道南西部には逆に7日早く到達していますが、北海道北東部では同時期に到達していました。



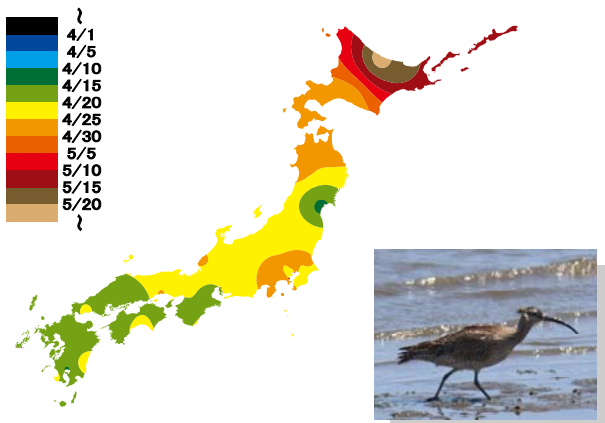
キョウジョシギ

例年、本州では4月中旬から観察され始めます。太平洋岸では、東北南部など周辺地域より渡来が早い地域があり、昨年度は4月下旬には北海道東部に到達していました。今年の春の渡りは、昨年同様に4月中旬に東北南部、関西、九州で初認され、北海道南西部までほぼ同時期に到達しましたが、北海道北東部への到達は昨年より1ヶ月遅れました。



チュウシャクシギ

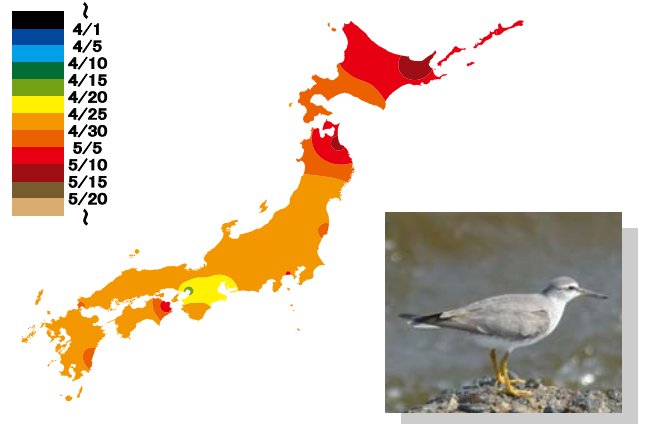
例年、本州では4月中旬に観察され始め、4月末には北海道でも観察されます。短期間のうちに北上します。今年の春の渡りは、昨年より2日早く、4月上旬には東北、中部以南で観察され始めました。北海道南西部にも4月下旬には到達しましたが、北海道北東



部では、5月中旬に観察されています。

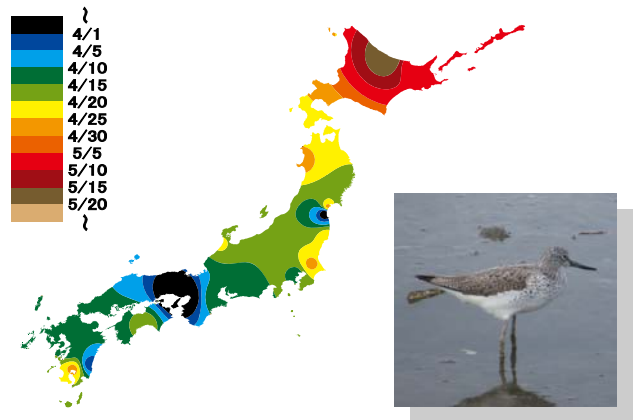
キアシシギ

例年、本州には4月の中下旬に観察され始め、5月上旬には北海道で観察されます。対象種の中では最も遅く、短期間のうちに北上します。今年の春の渡りは、4月中旬に昨年より3日早く関西で初認され、北海道南西部にも4月下旬に、昨年より6日早く到達しました。しかし北海道北東部では5月初旬と、昨年と同時期となりました。



アオアシシギ

関東周辺でも例年越冬しています。今年の春の渡りは、3月末には東北南部、関西で初認され、5月の中旬に北海道東北部に到達しています。



全般に、昨年より早い傾向があり、一昨年とよく似た渡来状況でしたが、4月終盤に渡来する種では、北海道東北部への到達に時間がかかっており、気象との関係について詳細に分析する必要があります。また、モニタリングサイト1000の結果より、越冬個体が少ないシーズンであったと報告されているので、初認情報が春期の観察個体数の影響を受けていないか検証する必要があると考えています。

ある一日、東京湾には 何羽のシギ・チドリ類がいるのだろうか？

守屋年史 東京湾シギ・チドリ類一斉調査GP



2012年の秋に、東京湾シギ・チドリ類一斉調査を始め、今春で2年分のデータが得られました。モニタリングサイト

1000シギ・チドリ類調査でも一斉調査が実施されていますが、前後1週間の期間で行うため、期間中に移動した個体群が重複カウントされることも起こり得ます。そこで、ある一日に東京湾にいた本当の数を記録するため、1時間という短時間で一斉カウントを行いました。この2年分の調査結果と、40年前の一斉調査の結果を比較し、東京湾のシギ・チドリ類の現状を考えてみたいと思います。

1000シギ・チドリ類調査でも一斉調査が実施されていますが、前後1週間の期間で行うため、期間中に移動した個体群が重複カウントされることも起こり得ます。そこで、ある一日に東京湾にいた本当の数を記録するため、1時間という短時間で一斉カウントを行いました。この2年分の調査結果と、40年前の一斉調査の結果を比較し、東京湾のシギ・チドリ類の現状を考えてみたいと思います。

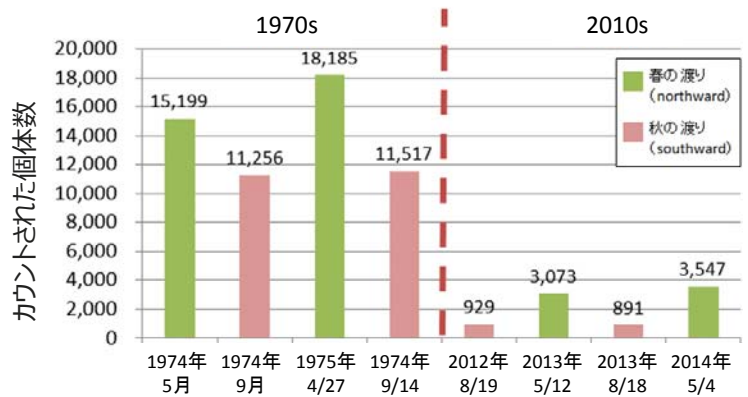


図. 東京湾内のシギ・チドリ類の過去と現在

調査地: 多摩川河口、六郷干潟、森ヶ崎の鼻、大井ふ頭中央海浜公園、ふるさとの浜辺公園、東京港野鳥公園、中央防波堤・外側埋立地、葛西臨海公園・海浜公園、行徳鳥獣保護区、江戸川放水路、塩浜海岸、三番瀬、谷津干潟、茜浜、幕張の浜、盤洲、富津岬

みんなで調査

調査には、普段環境省のシギ・チドリ類調査にご協力いただいている皆さんや地元の方々にご参加いただきました。またシギチドリ振興(信仰)のため、出来るだけ公開して興味のある方にも参加していただきました。調査日に皆さんの予定を合わせるのは大変でしたが、なんとか実施することが出来ました。

毎年春と秋の渡り時期および越冬期に調査を行いました。一日の中でも潮汐にあわせて移動するので、上述のように、基本的に最干潮の前後30分をコアタイムとした1時間の間にカウントしました。調査地は東京湾全域のうち、主要な場所を中心に設定しました。

40年間の大きな減少とその原因

調査の結果、春期は24種3,073羽と22種3,547羽、秋期は21種929羽と26種891羽、冬期は10種2,097羽(2013/2/10)と10種2,301羽(2014/2/16)が観察されました。春の渡りで多く、秋が少ないという結果は全国の傾向と同じです。湾奥部の三番瀬、塩浜海岸、谷津干潟などで多くの個体が観察されました。この一帯は潮の干満にズレがあり、それに合わせて移動することで長時間利用できるのも、シギ・チドリ類が滞在しやすい場所になっていると考えられます。

今から40年前、日本野鳥の会と鳥類保護連盟が合同で、全国のシギ・チドリ類の春期と秋期の一斉調査を実施しました。その中から東京湾内の結果を抜き

出して比較したところ、春期で約20%、秋期で約8%に減少していました。(図)。日々の移動や年による変動もあるので一概にはいえませんが、大きく減少していることは確かなようです。この原因は、東京湾内の埋め立て整備による生息場所の減少が最も大きいと考えられます。小荒井・中埜(2013)によれば、千葉県市原市から浦安市、東京都江東区から大田区、神奈川県川崎市から横浜市磯子区の沿岸は、1973年以前にすでに埋め立てが行われており、葛西臨海公園付近や盤洲干潟付近を除き、沿岸はほとんど整備されていました。つまり、一斉調査が行われた1974年以前から生息環境は損なわれていたと考えられますが、当時は開発途上で、土壌が安定するまで放置された埋め立て地には湿地に近い生息環境がありました。その後、一部は野鳥公園等になりましたが、大部分は乾燥化し、土地利用が進む中でシギ・チドリ類が利用できる環境は大幅に減少したと考えられます。

シギ・チドリ類は、都市環境に囲まれた干潟の生物の多様性を示す重要な指標です。数年後に同様の調査を行い、12,000kmの旅をする水鳥達の中継地としての東京湾が、維持もしくは回復しているよう、活動していきたいと思っています。また東京湾だけでなく、他の地域の状況も調査してみたいと考えています。

参考文献

- 日本鳥類保護連盟・日本野鳥の会. 1976. 干潟に生息する鳥類の全国一斉調査3.
- 小荒井衛・中埜貴元. 2013. 面積調でみる東京湾の埋め立ての変遷と埋立地の問題点. 国土地理院時報 No. 124(105-115).

野付湾のクマガンの渡来状況

～国内最大のクマガンの渡来地・野付湾～

藤井薫 根室市立啓雲中学校 (モニタリングサイト1000 野付湾 調査員)



野付湾は、北海道東部の知床半島と根室半島の間に位置する野付半島の南側の湾です。野付半島はエビの背中のように湾曲した形状でオホーツク海に突き出した日本最大の砂嘴(さし)で、その内湾には、複雑な形に突出した干潟が形成され、多くの底生生物が生息しています。また、日本最大級の藻場も形成されており、クマガンやオオハクチョウなどの渡り鳥にとっても重要な中継地です。毎年、春と秋に2万羽以上の渡り鳥に利用されており、2005年にはラムサール条約登録湿地

にも登録されました。今回は、その野付湾でモニタリングサイト1000の調査を担当して下さっている藤井さんから、野付湾のクマガンの動向をご紹介します。

春季より秋季の方が多い

日本国内に渡来するクマガンの中継地として、野付湾を含めた道東エリアが重要な地域であることは間違いない。その野付湾で2006年～2008年に環境省の委託を受け、野付半島ネイチャーセンターの調査グループが、詳細なクマガンの生息状況調査を行った。その成果とバードリサーチのガンカモ調査データベース(※)をもとに、野付湾でのクマガンの渡来状況を紹介する。

2004年から2014年の春季(3月～5月)と2013年の秋季(10月～12月)までの各年度の最大渡来数をまとめたのが図1である。これを見ると、秋季の方が春季よりも多くのクマガンが記録されていることがわかる。この期間での毎年の最大渡来数の平均値は、春季が771羽、秋季が2797羽であり、その差は3倍以上である。また、調査期間中に観察された最大渡来数は、2007年11月3日の6357羽であった。野付湾の南に位置す

る風蓮湖では、渡り鳥飛来状況調査(環境省)の中で、2010年4月18日に650羽が記録されている。また、厚岸・別寒辺牛では2011年12月20日に40羽が、モニタリングサイト1000のガンカモ類調査でも、琵琶瀬湾で2012年1月17日に455羽が観察されている。こ

図1. 野付半島におけるクマガン(*Branta bernicla orientalis*)の渡来状況。各年度の春季(3月～5月: ■)・秋季(10月～12月: ■)の最大数

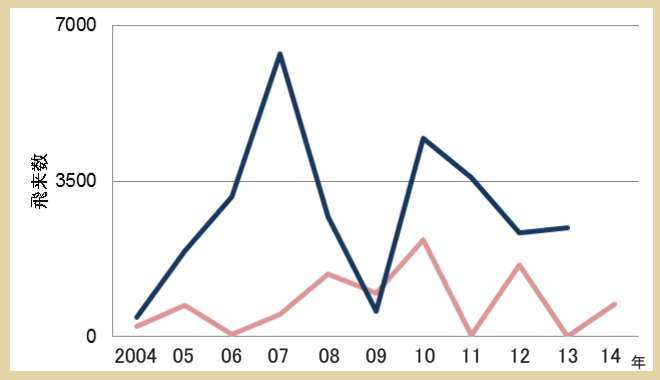


写真1. 野付湾ナラワラ付近で群れるクマガン 筆者撮影

のほか国後島ケラムイ岬では440羽が観察されており(クリスキー自然保護区副所長 マクシムアンチピン氏 私信)、これらを考慮すると、毎年少なくとも3000羽以上の、そして多い年では、8000羽を超えるコクガンが道東エリアを通過していると推定される。

野付湾凍結以後のコクガンの動き

野付湾には、コクガンの主要な食物であるアマモの国内最大級の藻場があり、それがコクガンの大量渡来の要因となっている。そのため、12月下旬以降に野付湾内が厚い氷に覆われ始めると、アマモがとれなくなり、コクガンの南下が始まる。そして、厳冬期には数十羽の越冬群を除き、ほとんどのコクガンが姿を見せなくなる。

コクガンはガン類の中でも海岸を主な生息場所とし、その日の状況によって集散を繰り返す傾向がある。また、長大な海岸線をカバーする調査が難しいなど、渡来数を正確に把握出来ない事が多い。そこで、野付湾の凍結後のコクガンの動きを把握するための一つの方法として、2004年から2014年までのガンカモ調査データベースのコクガンの全記録データの中から、比較的各地のデータが揃っていた2006年度冬季の各地のコクガンの最大渡来数を重ねてみた(図2)。

図2をもとにコクガンの国内での動きを考察すると、毎年、秋季に道東エリアを通過した3000羽～8000羽のコクガンは、野付湾等の凍結が始まる12月下旬に、おもに北海道南部や東北地方北部の湾内、また海岸でその多くが越冬していると推定される。そして、東北地方から近畿地方までの非常に広範囲な海岸線に分散して越冬しているのではないかと考えている。

今後期待する事

宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田氏らは、南三陸で2014年1月21日に捕獲した9羽のコクガンのうち、5羽に衛星送信機を装着した。コクガンにおける衛星追跡は、アジアでは初めての試みである。これによって、これまで分らなかったコクガンの渡り経路が解明されることが期待される。また、野付湾とその対岸にある国後島ケラムイ岬のコクガンの生息状況について、日露の研究者同士の交流も始まっており、コ

図2. 主要な国内のコクガン渡来地における2006年度冬季の渡来状況～各渡来地の最大渡来数(バードリサーチ・ガンカモDBのデータより)



クガンの同日カウント調査の実施や、観察データの共有化などについて検討されている。これらもコクガンの生態を解明する上で非常に重要な研究となる可能性がある。



写真2.

南三陸で捕獲され、嶋田氏らによってGPSが装着されたコクガンを、根室市ノサップ岬周辺の海岸で観察出来た。2014年4月19日 根室市瑤瑤漁港。筆者撮影。

※ガンカモ調査データベース

バードリサーチが実施しているガンカモ調査や、環境省のモニタリングサイト1000ガンカモ類調査などの記録を検索できるデータベースで、今後一般公開される予定。モニタリングサイト1000のデータは環境省生物多様性センターのサイトでも公開されています。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/>

シロチドリの保全

～フランス、ドイツ、オランダ、デンマークの状況～

笠原 里恵



シロチドリは日本の砂浜を利用するシギ・チドリ類の中でも個体数の減少が著しく、環境省のレッドリストでは絶滅危惧II類に指定されています。バードリサーチではシロチドリの生息状況の情報収集や繁殖環境の調査を行っていますが、減少要因の解明や保全施策は緒についたばかり、というのが現状です。

一方で、シロチドリの生息が脅かされているのは日本だけではありません。ヨーロッパの沿岸域で繁殖するシロチドリでも、個体数の減少が懸念されています。2013年の9月、研究者や保全学者らが集まって、この種に関するワークショップがドイツのベルゲンフーゼンで開催されました。ここでは、北西ヨーロッパで繁殖するシロチドリに関して、最近の保全と研究構想の情報交換、そして、この種の保全方法をどのように改善できるのか、ということが議論されました。そこで得られた結果には、日本にも適応できる事例があるかもしれません。そこで、今回は、そのワークショップの報告書から、ヨーロッパのシロチドリを脅かす要因や、保全の手法とその評価について紹介したいと思います。



シロチドリ 守屋年史撮影

ヨーロッパでの減少要因と対策

フランス北西部のブルターニュ地方からデンマークまでの沿岸部で繁殖するシロチドリの数は、オランダとドイツ北西部では、減少傾向にあります。Joint Monitoring Breeding Bird Groupがワッデン海で行っている鳥類の繁殖状況調査によれば、長期的(1987/88から2009/10)にも短期的(1998/99から2009/10)にも個体数は大きく減少しています。一方で、ブルターニュ地方やドイツ北東部などで、増加傾向が見られる地域もあるようです。最近のデータからは、オランダやドイツ、デンマークでの合計つがい数は500以下、フランスのブルターニュ地方では多くて200とされています。また、これらの繁殖数を把握する調査とともに、カラーリングを用いた標識調査、繁殖成功や繁殖失敗の要因解明のための研究が進められており、シロチドリの繁殖地への執着性や、サイト間での移動性が明らかになってきています。

シロチドリに脅威となる要因は、国や地域によって異なるものの、おもに、生息地の消失や生息地の質の低下、旅行者等による攪乱や海岸の踏みつけ、哺乳類や鳥類による卵や雛の捕食などが知られていま

す。保全の取り組みは、減少が懸念されているほとんどの国や地域で行われていますが、国や場所で、また脅威の種類や地域的な背景によってその取り組みは様々です(表)。少なくとも、地域的な規模で有効な手段は、観光客に対する保護柵の設置(フランスのブルターニュ地方では、ボランティアの監視員“Plover keepers”も配置)、ある程度の範囲を立ち入り禁止にすること、捕食者を管理すること、などです。また、牛の放牧、草刈り、塩や淡水で一時的に覆う、などで植物の植生高や密度を減少させるような、半自然地域における植生管理に基づいた生息地管理も、シロチドリの生息地を作り出すうえで効果的な手法となるかもしれません。この1例として、オランダでは、実験的に地面をイガイ類の貝殻もしくは塩の層で覆うことも行われました。このほか、ワッデン海に人工的な砂質の島を造成する計画があったり、新しい啓発プロジェクトも実施されるようです。さらに、よりシンプルですが効果的な手法として、局所的な営巣地を作り出すために、堤防から漂流物を除去しないことや、採食により植生を短く維持して営巣環境を作り出してくれるカオジロガンを、なるべく攪乱しないことなども挙げられています。

表. フランスやドイツ、オランダで実施されている、シロチドリの実施の手法とその評価

保全の手法	国・地域	効果	備考
巣周辺の保全			
巣を囲う	フランス	×	成鳥の死亡率が高まる可能性がある。
	ドイツ	不明	ハジロコチドリでは、孵化率が高まる？
繁殖地の保全			
捕食者の管理 (晩冬に狐獾を集中的に行う)	ドイツ (保全干拓地)	○	特定の地域では、多くの年で、キツネがいなくなり、高い繁殖成功が得られた。
哺乳類の捕食者対策として、小さなコロニーを柵で囲う	シロチドリに対しては行っていない	不明	他の地上営巣種では部分的に成功しているが、沿岸域では電気柵の設置は難しい。
旅行者対策として、保護柵を設置する	フランス	○	ボランティアの監視員(Plover keepers)と併用することで効果がある。
	ドイツ	多分×	以前は効果があったが、現在は繁殖成功には捕食の方が影響が大きいのか、あまり効果がない。
ボランティアの監視員“Plover keepers”を柵の周辺に配置する	フランス	○	繁殖成功が高まった。
広い範囲の繁殖地を立ち入り禁止にする	ドイツ (保全干拓地)	○	何年も旅行者からの攪乱がないことで、多くの年で繁殖数が多く、しかも繁殖成功率が高まった。
生息地の保全			
アスファルトの堤防から、漂流物を除去しない	ドイツ (保全干拓地)	○	10つがい程度が、堤防に定着した。
牛の放牧による植生管理	ドイツ (保全干拓地)	○	放牧した範囲で、繁殖数が増加した。
草刈りによる植生管理	ドイツ (保全干拓地)	○	繁殖数が増加した。
塩の層で地面を覆う植生管理	オランダ	不明 (多分○)	植生構造やサンドウィッチアジサシのコロニーには効果的。
貝殻で地面を覆う植生管理	オランダ	不明 (多分○)	限定的な1地点のみであるが、ソリハシセイタカシギに効果的。
塩水のくみ上げによる植生管理	オランダ	不明	
	ドイツ (保全干拓地)	多分○	シロチドリに特化して行ったわけではないが、塩水をくみ上げて作成した塩水ビオトープの範囲では繁殖数が多かった。
淡水を高い水位で維持することによる植生管理(冬と早春)	ドイツ (保全干拓地)	○	湿地が先駆的な植物の生えた泥地として、シロチドリにとって好適な繁殖地になった。
カオジロガンの狩猟や攪乱をしない	ドイツ (保全干拓地)	○	ガンの採食によって、シロチドリに好適な繁殖地が出来た。
人工的な砂の島の造成	オランダ	不明	計画が作られている。
市民への啓発			
啓発キャンペーンの実施	オランダ	不明	プロジェクト“A haven for birds and people”が始まった。”

引用文献 D. V. Cimiotti & H. Hötter (2014) Conservation of Kentish Plovers in NW Europe: results of a workshop in N Germany. WSG Bulletin 120: 218-220.

フライウェイ全国ガンカモネットワーク 交流会開催

澤祐介 一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京



東アジア・オーストラリア地域 フライウェイ・パートナーシップ

渡り鳥の主要な渡り経路は、フライウェイと呼ばれ、日本に飛来する多くの渡り鳥は、「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ」を利用しています。北はアラスカ、ロシア東部から、日本や中国東部を通り、東南アジア、オセアニア地域にまで及びます。この地域で渡り鳥の保全を推進する枠組が、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ (EAAFP) で、現在30の国や団体が参加しています。バードライフ・インターナショナル東京は、この取り組みの日本国内の事務局を担当し、生物多様性保全や持続的な利用に関する普及啓発、調査研究、情報交換等に関わっています。そのEAAFPの活動の一つに、渡り鳥の重要な生息地をフライウェイサイトとして登録し、サイト間のネットワークを形成して情報交換を促進する仕組みがあり、日本国内では30か所がこのネットワークに参加しています。

フライウェイ全国ガンカモ ネットワーク交流会開催

2014年3月1日～2日に、フライウェイのガンカモ類サイトの自治体を対象に、全国ガンカモネットワーク交流会が、環境省と秋田県大潟村の主催で、大潟村で開催されました(右上写真)。この交流会は、各サイトでの取り組みや課題を共有し、それぞれの普及啓発等に活用していただくことが目的です。始めに、日本雁を保護する会会長の呉地さんより近年のガンカモ類のおかれている現状について講演があり、ガン類の保

全活動の状況や、マガン等の個体数回復に伴う農業被害リスクの増加などをお話ししていただきました。

続いて、小グループに分かれてサイト間での情報交換を行いました。その中では、行政、地域住民、農家などの間に温度差があり、ふゆみずたんぼや減農薬農法などの普及が進まない現状や、調査員不足などについて話し合われました。成功している自治体の事例などから、こうした課題については、行政やNPO、地域住民が協力して活動していくことが重要との意見が出ました。参加者からは、市民団体が力を入れて動いているサイト、自治体が率先しているサイトなど、色々な立場の方々と意見交換ができ、参考になったとの声も聞かれました。

同様の交流会は、本年度にシギ・チドリ類、来年度にツル類のサイトを対象に実施する予定となっています。今後もネットワークを活用し、渡り鳥の保全や啓発活動を活性化するための取り組みを実施していきたいと考えています。



水田から飛び立つマガンの群れ
撮影 大潟村の自然を愛する会 堤朗

バードリサーチ 水鳥通信 2014年 8月号(10号)

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

発行者: 植田睦之

URL: <http://www.bird-research.jp>

編集者: 神山和夫・守屋年史・青山夕貴子・笠原里恵

タイトル写真募集中!

ご提供いただける方は
写真を電子メールにてお送りください!

このニューズレターはFSC認証紙を使用しています。